

第5回告白福音ルーテル連盟総会(CELC)

2005年5月31日から6月2日

於:千葉県成田(日本)

総会主題「救い主を熱心に待ち望みなさい」

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」(ピリピ人への手紙 3:20-21)

論文第4部

「あなたは神の裁きの座に立たなくてはなりません、

熱心に主を待ち望みなさい。」

論文作成者: 芳賀弥男牧師

内容

1. 裁きの日に誰が裁かれますか?
2. 裁き主は誰ですか?
3. 裁きの基準と裁きでの信仰の証拠の使用について
4. 地獄での罰の存在と永遠性
(典型的な誤り:地獄の否定と地獄の期間を限定すること)
5. キリストの裁きの席に立つことを、楽しみに待っているクリスチャンの態度

主にあって愛する世界中の兄弟姉妹の皆さん。主にある信仰と真理において、主が私たちに与えられた聖書を基準に一致でき、このような世界大会を開け、共に聖書を学び、礼拝できる機会を私たちに与えてくださった恵み深い主に栄光あれ。

「裁きの日」に関して、「地獄」について聖書から逸脱した教え、教会が多くなっている現在、この機会に主が聖書に明確に示された御言葉をしっかりと思い巡らし、私たちの知識と信仰が増し加えられ、私たちが恐れと絶望によってあなたの再臨を待つことのない様に、私たちが喜びと感謝をもってあなたを待ち望む者とさせてください。私たちの教会、牧師がこの世的な誤りに対しても、御言葉の武具をもって立つことができますように。

1. 裁きの日、誰が裁かれますか？

裁きとよみがえりとの関係

まず「裁きの日誰が裁かれるか？」という質問は、「誰が死からよみがえるか」という質問とも密接な関係があります。主は信者のよみがえりについて、聖書の多くの部分で書き記し、私たちに励ましています。(イザヤ 26:19, ルカ 20:35, ヨハネ 11:25, 26, ペリピ 3:11)

しかし、他方では未信者のよみがえりについても数多く言及されているのです。ヨハネの福音書では「墓の中にいる者がみな、この声を聞いて出てくる時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです」(ヨハネ 5:28-29)パウロもパレスチナの総督であるペリクスの前で弁明しています。「義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。」(使徒 24:14-15、ダニエル 12:2 も参照)

このように、信者も未信者も終わりの日の裁きに居合わせるのです。また聖書では「わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。」(マタイ 12:30)と言っているのです。神が存在しないことを望んでいる「無神論者」であるとか、神がいることに疑いを持つ「不可知論者」も例外なく「さばき」の対象として含まれるのです。ですから、「裁きの日、だれが裁かれるか？」という質問と、全ての人がよみがえるという事実とは無関係ではありません。全ての人がよみがえって裁きを受けるのです。

信者はもちろん、永遠の命、栄光の体を持って天国に入りますが、未信者は滅びる体ではなく、滅びない、消滅しない体を持って永遠の苦しみを受けるために地獄に入ります。ですから、私たちは「未信者はよみがえらない」という偽教えを退けます。もし、そうならば未信者の体は裁きの対象外になるからです。信者も未信者は体においても魂においても神の裁きを受けます。

全ての人が裁かれる

神の裁きの座の前に現れるか、現れないか？それは人間一人一人が選択できる問題ではないのです！全ての人はキリストの裁きの座の前に立たなければなりません。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」(Ⅱコリント 5:10)「それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」(ローマ 14:10、11)「人間には、一度死ぬことと死後に裁きを受けることが定まっているように」(ヘブル 9:27 マタイ 25:32, 使徒 17:31)

終わりの日に生きている人だけではありません。「生きている人と死んだ人を裁かれる」(Ⅱテモテ 4: I)と書かれているように、**全ての時代の全ての人が裁かれます。誰も見過ごされることはありません。誰も逃げることはできません。**「人が隠れたところに身を隠したら、私は彼を見ることができないのか? 主の御告げ—天にも地にも、わたしは満ちているではないか?—主の御告げ—」(エレミヤ 23:24、ダニエル書 12:1-2「多くの者」とはこの場合「全ての人」を意味する。) **罪を隠すこともできません。**「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」(ヘブル 4:13, ルカ 12:2.)

また、**罪を犯した天使たちも、裁きを受けます。**「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、裁きの時まで暗闇の穴の中に閉じ込めてしまわれました。」(Ⅱペテロ 2:4、マタイ 8:29) **裁かれる人は例外なく全ての人間です。**敬虔な者も、不敬虔な者も(Ⅱコリント 5:10、ローマ 14:10,) 生きている者も死んだ者も(使徒 10:42) 悪い天使も(Ⅱペテロ 2:4、ユダ 6) さばかれるのです。

クリスチャンも裁かれます

「クリスチャンは裁きを受けない」という教えは、神の言葉を曲解しています。日本でも「裁く」という言葉の意味は、怖い印象、悪い人だけが裁かれるというような印象を受けます。そのような思いから聖書の曲解が起こるのかもしれませんが、ギリシア語の「裁く」という言葉の意味は「**聖別する**」「**判断する**」という意味です。マタイ 13:24-30にあるように、クリスチャンは裁きの日に全ての{毒麦}、また全ての罪から来る影響である、死、悲しみ、悩み、労苦、病気、偽教えなどから分けられます。その分別は悪い印象というよりも、喜んで待ち望むことができるという印象を残します。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」(ダニエル 12:2)もし、**クリスチャンが神の正しいさばき、つまりイエスにあつて無罪であると言う判決を受けないならば、それは一番の悲劇ですね。**ですから、神を信じる者にとっては「終わりの日」「裁きの日」と呼ぶのと同様に、「喜びの日」「贖いの日」と呼ぶこともできるでしょう。(エペソ 4:30, イザヤ 63:4)

しかし、私たちは時々聖書の中で「御子を信じる者はさばかれぬ」(ヨハネ 3:18, 5:24, ローマ 14:22)と言う言葉に直面します。混乱するかもしれませんが、この外見的な矛盾は「律法と福音」の適用から来る矛盾です。律法によると全ての人間はキリストのさばきの座に立たなければなりません。しかし、福音によると信者は罪の宣告を受けません。つまり、神の裁きの座の前に現れる信者は、有罪宣告の本質を持っていません。なぜならば神を信じる者の罪はキリストの贖いへの信仰を通して全て赦されたからです。(マタイ 25:34) 聖書に矛盾はありません。(ヨハネ 17:17)終わりの日についても、キリストは律法と福音の教えを適用しています。全てのクリスチャンは「古い人」を持っているので、律法は警告しているのです。(Ⅱコリント 5:10, ローマ 14:10)

アウグスブルグ信仰告白の第 17 条においてもこのことは明確に示されています。また、ユダヤ的な異端の教えとして、死者の復活、つまり裁きの前に聖徒たちのみがこの世の国を建て、神を認めない人たちは抹殺されると言う偽教えについて排斥されています。現在の千年王国説もこれと似ていますが、聖書に基づいて、私たちはもちろんそれらを受け入れることはできません。

2. 裁き主は誰ですか？

裁き主イエス・キリスト

使徒信条の第2条で「主は生きている人と死んだ人を裁くために、そこから再び来られます」と告白しています。聖書では誰が裁き主かをはっきりと教えています。「イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者との裁き主として、神によって定められた方であることを人々に述べ伝え、その証しをするように、言われたのです。」(使徒 10:42) イエスは父が彼にさばきを行う権威を与えられたと私たちに知らせています。「また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。」(ヨハネ 5:27) **他のいくつかの言及から、神はイエスにこの偉大な権威を代表させたということは明らかです。**「神の御前で、また、生きている人と死んだ人とを裁かれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私は厳かに命じます。」(Ⅱテモテ 4:1)「人の子が、その栄光を帯びて、全ての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、全ての国々の民が、その御前に集められます。**彼は**、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。」(マタイ 25:31-33)(参照:使徒 10:42 ヨハネ 5:22, Ⅱコリント 5:10,)

カヤパとピラトの前に立って、無罪であるのに有罪の判決を受け、群衆からも「十字架につけろ」とののしられたイエスが、終りの日には全ての生きている人と、死んだ人、もちろんカヤパもピラト、イエスを鞭叩いたローマの兵士たちも含まれていますが、イエスによって裁きを言い渡されるのです。

しかし、私たちは三位一体なる神の、それぞれの位格を厳密に分けることができないように、この裁きの役割も、厳密に父なる神から離れているものだと言い切ることはできません。また、イエスご自身の判断は父なる神、聖霊なる神と異なることはないためです。(ヨハネ 5:30,10:30)ですから、もちろん私たちは広い意味で三位一体なる主なる神が終わりの日の裁き主だと言う事ができます。

義人も裁く権がある

義人、つまりクリスチャンたちもキリストと共に世を裁くということは、聖書の明白な教義です。「あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということを、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。」(Ⅰコリント 6:2-3)「また私は多くの座を見た。彼らはその上に座った。そして**さばきを行なう権威が彼らに与えられた。**」(黙示録 20:4)「そこでイエスは彼らに言われた。『まことに、あなた方に告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着くとき、わたしに従って来たあなた方も 12の座に着いて、イスラエルの 12の部族をさばくのです。』(マタイ 19:28,ルカ 22:29,30)

義人の判断はイエスと一致する

しかし、私たちは次の御言葉を覚えなくてははいけません。「律法を定め、さばきを行なう方は、ただ一人であり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。」(ヤコブ 4:12)ですから、**義人が一人ひとりそれぞれの判断によって、裁きの権威を行使するというものではありません。**神の恵みによって義と認められた私たちはよみがえって神の正しい裁き受け、すでに「神のかたち」を完全に持つ義人とされています。「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しい体を、ご自身の栄光の体と同じ姿に変えてくださるのです。」(ピリピ 3:21)ですから、「神のかたち」を持ち、神

の御心と調和する義人は、裁き主であるイエス・キリストの裁きの基準と異なった判断をすることはありません。キリストの思い、判断と私たちの思い、判断は完全に一致します。

キリストの決定と判決に賛成し、協力するのですから、クリスチャンも世をさばき、悪い天使たちを裁きます。神が私たちに与えられたこの権威について、私たちは詳しく話されていないとしても、キリストが私たちクリスチャンたちにこの権威を分け合ってくださいという事実を確信し、喜びとしましょう。そして、恵みによってキリストが私たちに与えるこの偉大な名誉は、この世の中においても兄弟たちの間を正しくさばくようにクリスチャンを促します。イエス・キリストを通して恵みによって救われた私たちは、この世の全てのことに對して、御言葉に一致して見分けなければなりません。

3. 裁きの基準と、裁きでの信仰の証拠の使用

律法によって裁くのではない

この世の裁判官は国の法律に従って判決を決めます。同様に、もしイエス・キリストが律法に従って人々を裁くならば、一人残らず誰もが有罪です。そして「地獄での永遠の死」という罰が与えられます。「あなたのしもべをさばきにかけてください。生ける者は誰一人、あなたの前に義と認められないからです。」(詩篇 143:2)「人はその口にするあらゆる無駄な言葉について、裁きの日には言い開きをしなければなりません。」(マタイ 12:36、ローマ 14:12、II コリント 5:10)「なぜならば、律法を行うことによっては、誰ひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」「ところが、律法によって神の前に義と認められるものが、誰もいないと言うことは明らかです。」(ローマ 3:20、ガラテヤ 3:11) これらの聖句は私たちが律法によって裁かれるならば、誰ひとり神の御前で無罪とされないことを強調しています。

しかし、安心しましょう! キリストは律法に従って裁くと言っていません。もし、そうならば、キリストが成し遂げた全人類のための身代わり、よみがえりは意味のないものとなります。(I コリント 15:17-18)

福音にしたがって裁く

イエスはヨハネ 12:48 で「わたしの語った言葉が、終わりの日にその人を裁く」と語っています。この「言葉」とは何でしょうか?それは福音です。(ローマ 2 : 16) 人が福音を個人的な信仰によって受け入れたか? (主観的義認) 不信仰によって拒んだか?つまり、神は福音に対する個人的態度のおりに裁かれるのです。「信じてバプテスマを受ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」(マルコ 16:16)「わたしの言葉を聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠の命を持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)「そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じた全ての者---そうです。あなた方に対する私たちの証言は、信じられたのです。---感嘆的的となられます。」(II テサロニケ 1:7-10) 要約すると、人の永遠の運命は人生においてキリストの福音を信じるか、信じないかただその一点にのみかかっているのです。キリストを信じる者は罪の宣告を受けないのです。ただそれだけです。(ヨハネ 2:24)それが福音です。それが救いを得させる神の力です。(ローマ 1:16,17)

しかし、多くの人がこの点で疑問に持つことがあります。聖書では恵みによって、信仰をとおして救われ、善行によって救われるのではないことを私たちに伝えていますが、(エペソ 2:8,9)、時々ある箇所、マタイ 25 章などでは善行によって救われるかどうかが決まるかのように私たちに伝えている箇所があります。これらは裁きの時と、救いのための基準について矛盾を教えているのでしょうか?

なぜ、聖書では善行が裁きの基準であるかのように語っているのか?それは人間の行いが信仰、不信仰を公に現す実であるからです

聖書はときどき善い行いが裁きの基準であることを示すように見えます。もし、神の言葉の全体を見なければ、私たちはさばきの基準について混同するかもしれません。(マタイ 25:33-44、黙示録 20:12

ヨハネ 5:28,29、ヤコブ 2:24) 主は心を見ます。(Iサムエル 16:7) 人間には他の人の考えと動機を見ることはできません。しかし、主は見ることができます。(Iコリント 4:5、ヘブル 4:12,13) 人間は自分の生み出す行いによって、心の思いを見せるでしょう。そのような行いは私たちの信仰の公の証拠です。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。」(ヘブル 11:6) 神から見た真の良い行いとは、キリストへの目に見えない信仰から来る、目に見える実なのです。「わたしはぶどうの木で、あなた方は枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中に留まっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなた方は何もすることができないからです。」(ヨハネ 15:5) 「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」(ガラテヤ 5:6) 「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」(ガラテヤ 5:22) 「行いのない信仰は、死んでいるのです。」(ヤコブ 2:17,26)

ヤコブの手紙を読むときに、この手紙の書かれた時の状況を無視するならば、あなたは混乱させられるかもしれません。ヤコブは「信仰によって救われる」という事実を知っていながら、乱用していた人々を戒めているのです。ある人々は「どんな善い行いも必要ない」という考えに誘惑されました。しかし、ヤコブは「そのような信仰は真の信仰ではない。人の中にだけ留まる信仰はない。行いのない信仰は死んでいる」ことを伝えているのです。

一般的に「信仰の実」と言う言葉を聞くと、多くのクリスチャンは伝道、隣人への奉仕作業、献身的な祈りなどだけを思いがちですが、私たちの目からは小さいように思える行いでも、キリストへの信仰から出たものであるならば、それは神にとって素晴らしい奉仕であり礼拝です。言葉、または行いによる信仰告白も善行です。「私は信じた。それゆえに語った。」と書いてあるとおりです。(IIコリント 4:13) 人間にとっては美しい言葉や雄弁な告白でなくても、もしそれが信仰から出るものならば、それは主に喜ばれる信仰の実です。(ルカ 21:1-4、ヘブル 11:4) 幼子、乳飲み子のような純粋な「信頼」こそ、神の国に入るのにふさわしいことをイエスも言っていますね。(ルカ 18:15-17、詩篇 8:2) 私たちは行いを目に見える量や形で判断しがちですが、最後の日のさばきの基準は、人間の考えるようではありません。

よく聖書を知っている聖書学者、毎週礼拝に来る人、洗礼を受けた人であっても、イエス・キリストを自分の救い主であることを信じない人はイエスの左(山羊)に立つことになります。その描写の意味は有罪とされるということです。逆に評判の悪い取税人、姦淫の女のように世の中で悪い評判を持っていた全ての人々、また十字架に架けられた犯罪人や刑に処せられるほどの犯罪を犯した人でも救い主を信じる人は誰でも、たとえ死の間際であってもキリストの右に立ちます。イエスを自分の罪の罰からの救い主として信頼した人はイエスの右(羊)に立つのです。キリストの右に立つという描写は、罪がないと宣言されることを意味しています。

不信仰な者に対して

逆に有罪の判決を受ける人は、その人が犯した一つ一つの罪のゆえに裁かれるものではありません。(ヤコブ 2:10) 審判者はこの場合も彼らの心を見ます。もし、その人のうちにキリストへの信仰がなければ、彼は決して神の喜ばれる実を生み出すことはありません。人間の目から見た「良い行い」ではなく、審判者であるイエスは、「イエスへの信仰」という基準にしたがった「良い行い」に目を向けるということです。主にあってクリスチャンとしての良い行いがなければ、その人にはイエス・キリストを信じる信仰はないということです。「ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰が空しいことを知りたいと思いますか?」(ヤコブ 2:20) 「枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」(ヨハネ 15:4)

「神の御霊によって語るものは誰も『イエスはのろわれよ』と言わず、また、聖霊によるのでなければ、誰も『イエスは主です。』と言うことはできません。」(I コリント 12:3)

不信仰は罪です。しかし、彼らの犯した罪の故に救われたいと言うのは事実ではありません。イエスの贖いのゆえにその罪も赦されています。彼らが自分の救い主を拒むこと、救い主の差し出す「救いの衣」「正義の外套」を着ないので救われたいのです。(イザヤ 61:10, マタイ 10:33) **不信仰者はキリストの救いの恵みを拒んだがゆえに、引き起こした神の怒りをその上に留まらせるのです**「あなた方はよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者---これが偶像礼拝者です。---こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしい言葉にだまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。」(エペソ 5 : 5, 6)「キリストを信じなかったゆえに、彼らは自分の罪のうちに死ななければならないのです。」(ヨハネ 8 : 24)

イザヤ 13 : 9-13 は神の恵み受け入れない人にとって、神からの恐ろしい警告です。「わたしはその悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する」ですから、神の豊かな恵みのゆえに、本来ならば罪のゆえに永遠の罰に値するはずであった全人類のために、イエス・キリストご自身が唯一の完全な罪の罰の贖いの子羊となられた真実を、受け入れるべきです。聖書もはっきりと言っています。「キリストは全ての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。」(I テモテ 2:6, ヨハネ 3:16, I ヨハネ 2:2, テトス 2:11, ヘブル 2:9)

彼らの罪も赦されていました。日本でも自動車事故を起こしてその罰金を期日までに支払うならば、懲役を免れます。もちろんそれは赦されたことにはなりません、そのこと、つまり罰金を支払うと言う唯一の懲役を免れる方法を拒むならば、当然のこととしてその人は牢屋で服役しなければなりません。同様に、裁きの座において有罪とされる人も、彼らが唯一赦されるために必要なことを、彼らは拒んだのです。救い主という唯一の弁護人と、彼らの罪の贖い主を拒むことによって、彼らは自分自身に永遠の罰を招くのです。(ゼカリヤ 3:1-5, II コリント 5:19-21)

でも、覚えなくてはなりません。私たちの信仰のゆえに、良い行いのゆえに、価値があるから、救われるわけではありません。主への信仰も神からの賜物であり、神の業であると聖書は言っています。「あなた方が、神が遣わした者を信じること、それが神の業です。」(ヨハネ 6:29, 44, 65, エペソ 2:8, 9) 私たちの信仰の対象が真の救い主であり、私たちの信じる方が全能なる方であり、約束を守られる「主」の約束であるから救われるのです。主イエスキリストは私たちが救われる唯一の原因であり、理由です!

この教義についての偽りの教え

これまで見てきたように、全ての人はイエスの裁きを受けることが定められています。他の人の罪の罰を肩代りしたり、自分自身や、他の人の救いを自分の善行や価値によって勝ち取ることもできません。

日本でも「因が悪い」ということわざがあります。それは両親や親戚または先祖が犯した罪の罰をある人が背負わなくてはいけないと言うのです。ユダヤ人たちもこれと同じ誤った考えを持っていました。聖書でもそのことについて言及していますが、それは誤りです。(ヨハネ 9 : 1-7, エゼキエル 18:1-4, 20, 箴言 9:12) あなたや私の罪を他の誰かが責任を持つことはできません。神の御子イエス・キリストのみが、全ての人間の罪の責任を完全に引き取ってくださいました。(詩篇 49:7-9, 15, マタイ 11:28) ローマ・カトリック教会はこの裁きの基準について「神は愛を基準にして人を裁く」と言っています。もし彼らの言っている「神の愛=恵み」が「キリストの福音」ならば問題はありますが、彼らの「神の愛」についての定義は聖書から離れています。

もう一度言いますが、今までのことをまとめると全ての人間一人一人が、終わりの日にイエス・キリ

ストによって裁かれ、その裁かれる基準はイエス・キリストの福音を信じたか、信じなかったかと言うことになるのです。(マルコ 16:16,ヨハネ 12:48-50)その裁きの宣告に従って、人間は天国か地獄かのどちらかの場所で永遠の時間を過ごすことになるのです。

裁きは審査ではない

「さばき」といってもその人が罪を犯しているか、犯していないかを調べることはありません。なぜならば、イエスは知っています!イエスはイエスを信じていない人を皆知っています。「イエスは初めから、信じない者が誰であるか、裏切る者が誰であるかを、知っておられたのである。」(ヨハネ 6:64)イエスはイエスを信じている人をも皆知っています。「神の不動の礎は硬く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。『主はご自分に属するものを知った』(IIテモテ 2:19)それはイエスが永遠、全知なる神であるからです。そして私たちは信仰によって自分が救われることを知っていますし、確信しているのです。そして私たちは神との平安を持っています。(ローマ 5:1)

全ての人のさばきが終わりの日に決まるわけではありません。その人が死ぬとき、つまり恵みの時間が終わるときに、救い主を信じているかどうかによって決められるのです。「イエスは彼に言われた『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしと共にパラダイスにいます。』(ルカ 23:43)「また私は、天からこう言っている声を聞いた。『書き記せ。[今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。]』御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについていくからである。」(黙示録 14:13,ヨハネ 3:16) 救い主を信じて死ぬ者は、たとえ死の直前に信じるのであっても審判者の前で右に立ちます。しかし、救い主を信じないで死ぬ者は、たとえ死の直前まで救い主を信じていたとしても左に立って、神の罰を受けるのです。ということは「死」つまり「恵みの時間の終わり」が、私たち一人ひとりにとって、永遠の天国に入るためのタイム・リミットとなります。(ルカ 16:19-31)

この終わりの日の裁きは判決を公に宣告する時です。(マタイ 25:34、41)

これまでに見てきた様に、この判決はその人が死んだ時にすでに決定しています。「悪者が死ぬ時、その期待は消えうせ、邪悪な者たちの望みもまた消えうせる。」(箴言 11:7)「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、私はあなたに命の冠を与えよう。」(黙示録 2:10) 魂だけを考えるならば、その人が死んだ時にすでにその判決の執行がなされていますが、(ルカ 23:43)、裁きの日には公に、正式にその人の有罪、無罪かが宣言され、全ての人が魂だけではなく、体を持ってその判決の適応を受ける時なのです。

判決は罰と報いを伴う

判決は人が犯した罪に基づいて、罰と報いをもたらします。(IIコリント 5:10,ローマ 2:6-11) 不信仰な人が永遠の罰を宣告される時、人生において行った全ての罪のために罰せられます。(エペソ 5:5,6) 信仰を持った人が無罪を宣告される時、恵みによってその人は信仰によって行った全ての善行に関して報いを受けるのです。(マタイ 5:10-12)「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなた方のために備えられた御国を継ぎなさい。」(マタイ 25:34)

しかし、イエスとその恵みのゆえに天国に入れるからといって、私たちクリスチャンはいかなる偽教えにも妥協したり、天国でより偉大な者となるために善行を行なおうという動機を持つてはいけません。全ては主イエス・キリストからくる恵みによるものであると私たちは知っていますし、喜びとします!

神の言葉を思い出し、神への感謝と愛から神の言葉を守りましょう。「だれでもわたしを愛する人はわたしのことばを守ります。」(ヨハネ 14:23,24)

このさばきはまさしく正しいさばき

ですから「私は公正な裁きを受けることができなかった」などと、不平を言うことは誰にもできないのです。イエスは言いました。「わたしのさばきは正しい」(ヨハネ 5:30)全ては人間の考えからくる基準ではなく、神の御言葉によって定められた基準によって裁かれます。わが国でも最高裁判所が判決の最高の権威を持ち、その判決が最終決定であるように、全ての上の支配者であり、王であり、権威を持つておられる私たちの主の判決は覆ることも、裁きの基準が変わることもありません。不公平でもありません。神が「福音によって私たちを取り扱う」と定めてくださったことは、クリスチャンはもちろん、いや、全人類にとって一番喜ばしい知らせです。なぜならば、全ての人はキリストにあって、分け隔てなく「全ての罪が赦される」という権利をいただいているからです。私たちは将来について不安を持って過ごすのではなく、平安を持ち続けることができるからです。逆にある人が福音を拒み、自分自身を律法ののろいのもとに置くことは最も悲しいことでしょう。

4. 典型的な誤り:地獄の否定と地獄の期間を限定すること

地獄は事実、存在する

地獄は作り話でも空想でもなく、恐ろしい現実です。主御自身も地獄と地獄での永遠の苦しみについて語っています。「もし、あなたの手か足の一つがあなたをつまづかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちにはいるほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。また、もし、あなたの一方の目が、あなたをつまづかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちにはいるほうが、両目そろっていて燃えるゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。」「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」(マタイ 10:28)パウロも「そのような人々(福音に従わない人々)は、主の御顔の前とその御力からの栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」(Ⅱテサロニケ 1:9)と語っています。(マタイ 25:41,46)

地獄の苦しみの状態(完全な破滅ではない)

地獄について私たちは自分の想像よりも、聖書が何を言っているかを聞かなければなりません。地獄の痛みという罰の一番の恐ろしさは、「完全な破滅、消滅」にあるものではありません。マタイ 10:28の「滅ぼす」という言葉は、「完全な破滅」を意味しているものではありません。同じ言葉がⅡペテロ 3:6で旧約聖書の大洪水について用いられています。地上は大洪水によってまさしく「完全に消滅」したのではないことは皆さんもご存知ですが、地獄においても体と魂は完全に消滅するものではありません。地獄での消滅の罰を支持する教えは聖書からの根拠ではありません。エホバの証人は死後の不滅の魂の存在を否定します。そして彼らは神への不信仰の罰は「永遠の消滅」であると主張します。

地獄は元来悪魔とその手下のために用意された場所です。「のろわれた者ども、私から離れて、悪魔とその使いたちのために要された永遠の火に入れ、こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」(マタイ 25:41,46) マタイ 8:12では「泣き喚いて、歯軋りする」と書いてあります。それは自分の力ではどうしようもない苦痛と絶望、激怒を示しています。地獄に入った人は完全に神に見捨てられ、そこから出る事も、罰が軽減されることも、罰が終わることも、一時的に休みを得ることもできないのです。彼らの魂と体は痛みは永遠にあるのです。

永遠の痛み

マタイ 25:46で「こうしてこの人たちは永遠の刑罰に入り」とあり、またアウグスブルグ弁証論第17条「悪魔と共に終わりのない痛みにあわせる」と告白されています。天国においてクリスチャンたちの味わう神の祝福に満ちた生活が永遠にわたると同様に、不義な者たちには地獄での永遠の刑罰が与えられるのです。最後のさばきにおいて神を信じる人と信じない人の間に、完全で永遠の分離が起こります。(マタイ 25:46)

パウロは永遠の罰があると言うことは、自然の知識から人間はある程度推論できると言っています。(ローマ 1:18-21) 神の裁きの知識は、神が人間の心の中に書き記した律法の一部です。(ローマ 1:32) この理由から、異教徒たちの中にでも、私たちは永遠の罰の教義を確かに見つけることができます。もちろん、それは人間の理性やサタンによって曲げられていますが。

の明白な言葉に基づくものでなくてはなりません。

永遠の罰の本質

聖書は明確に永遠の刑罰の形または本質が、神の恵みと神との交わりからの永遠の追放、または神の愛とあわれみからの永遠の別離であると教えています。(マタイ 25:41, II テサロニケ 1:7-9) 私たちはイエス・キリストが私たちの全ての罪のいけにえとなられたことを知っています。イエスは確かに私たちが受けるはずであった永遠の罰と同じ罰を受けました。イエスがゲッセマネの園で「わたし(の魂)は悲しみのあまり死ぬほどです。」(マタイ 26:38)そして十字架の上でも「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マタイ 27:46)と叫ばれたことから、私たちの罪の罰を確かにその身に受けられたことが分かります。(イザヤ 53:4-6.)そしてイエスの言葉は本当に地獄の苦しみが存在し、その本質である「神から見捨てられること」がどれだけ恐ろしく、嫌なものかを伝えています。もともとは人間は神との交わりのために造られました。このことによるのみ、人間は真の喜び、平安を見出し、最高であり完全な賜物を受けるのです。(ローマ 4:25-5:1, 詩篇 17:15, マタイ 11:28, ヤコブ 1:17) 神に見捨てられるということの意味は、言葉で言い尽くせないような体と魂の最悪の苦痛です。

地獄はゴミ箱よりひどい

地獄で苦しみを受ける者は、罰の中でも最も恐ろしい罰を受けるのです。地獄は哀れみ深く慈愛深い、愛に満ちている神から完全に見捨てられた人が行く場所です。いわば、神から燃えさかるゴミ箱に捨てられたのと同然です。ゴミ箱に捨てられるよりももっとひどいのです。ゴミ箱の場合には、たとえ燃え続けるゴミ捨て場に捨てられたとしても、ある人はそのゴミが必要だと思ったり、もったいないと思い、そこから拾って再び利用したり、リサイクルとして使用するかもしれないからです。しかし、地獄に落ちた人には一筋の希望の光も永遠にありません。(ルカ 16:19-31)

地獄の火と暗闇

聖書で書かれている地獄の火と苦しみの性質について、私たちは十分理解できません。それよりも、主はこれらの言葉を通して、私たちが恐れること、注意することを望んでいるということを知るべきです。地獄の炎が物質的なもの(本当の火)であるか、非物質的なものであるかと言うのは問題ではありません。なぜならば、もしその「火」と言う言葉が比喩的な表現だとしても、それは言い表すほどのできない激しい苦痛であることを意味しているからです。(イザヤ 66:24) また地獄の暗闇も、この世の暗闇と比較することはできません。(II ペテロ 2:17, ユダ 13.)なぜならば「暗闇」と言う言葉が比喩的な意味であっても、その言葉は筆舌しがたい激しい苦痛ともだえ苦しみと全くの絶望を意味するからです。私たちは地獄の炎がどのようなものであるかに関して論じ合うことに時間を費やすよりも、人々が地獄の苦しみから逃れる唯一の方法をどのように伝えられるかについて思い巡らす時間を持つこと、私たちは神の言葉の福音の真理を人々にどのように伝えるかについて思い巡らすために時間を費やす方が有益です。

地獄では誰もが主を認める

なぜならば彼らの終わりのない苦痛は、ルカ 16:27、28 に書かれているように義なる、全能の裁き主の存在を確信させるからです。地獄に行った人々は天国で永遠の祝福の中を過ごしている人を知っているようです。(ルカ 13:28, ルカ 16:23) 彼らの恥と、悔しさが更に増すでしょう。

軽減のない地獄の苦しみ

地獄の苦しみには軽減がありません。「彼(お金持ち)は言った『父アブラハムさま。私を哀れんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。私たち(天国にいるアブラハム、ラザロ)とお前たち(地獄にいるお金持ち)の間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ超えてくることもできないのです。』(ルカ 16:24,26) 地獄で苦しむお金持ちには一滴の水さえも与えられませんでした。地獄の苦しみには終わりも、軽減ありません。逃げることもできません。(マタイ 25:41、マルコ 9:48, II テサロニケ 1:9) 地獄には全く希望がないのです。(II ペテロ 2:17, ユダ 13.)

更に聖書は地獄の苦しみについて、さまざまな描写で表現しています。「艱難と苦悩」(ローマ 2:9) 「ハデスで苦しみながら」(ルカ 16:23) 「私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。」(ルカ 16:24) 「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身で命に入るほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとって良いことです。」(マルコ 9:43,44) 「火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯軋りするのです。」(マタイ 13:50,8:12) 「そのうじは死なず、その火も消えず、それは全ての人に、忌み嫌われる。」(イザヤ 66:24) 「誰がそれに耐えられよう」(黙示録 6:16,17)など。聖書は短い表現であっても、地獄での体と魂の永遠の苦しみは、私たちが想像できる最も厳しい言葉を用いています。事実、それらは私たちの理解を超えています。なぜならばそれらはこの世に生きている人間には未体験のことですし、私たちには計りえない永遠のものであるからです。

体だけではなく魂も苦しむ

地獄で受ける永遠の苦しみは、体だけに起こるものではありません。魂も永続的な激しい苦痛を受けます。(ガラテヤ 3:10) 恐怖によっても永遠に苦しみます。(ルカ 16:27,28) 地獄の激しい苦痛は死によって体を離れるとすぐにのろわれた魂に降りかかるのです。(ルカ 16:23)

のろわれた者の地獄での永遠の苦痛について、更に詳しく言及するために、それらを「否定的苦痛」と「肯定的苦痛」に分けることができます。「否定的苦痛」とは神の全ての祝福の損失(マタイ 25:41) 全ての祝福の交わりからの離別(ルカ 16:26, マタイ 8:12, 黙示録 22:15) 全ての哀れみからの別離(ルカ 16:25,26) 彼らを慰める全てのものを完全に失うこと(黙示録 6:16,17) があげられます。

「肯定的苦痛」とは、魂の最も激しい苦痛があるということ。(マルコ 9:48) 悪魔とその御使いたちとの交わり(マタイ 25:41) 地獄において永遠に制限されること、(マタイ 25:30, I ペテロ 3:18-20, ユダ 6.) そして絶え間なく続く燃え尽きない火による苦痛があるということです。(ルカ 16:23,24, 黙示録 14:10,11,20:10,15)

地獄の苦しみの段階

地獄の苦しみ自体、想像を絶するものですが、その苦しみの中にも段階があるようです。「主人の心を知りながら、その思い通りに用意もせず、働きもしなかつたしもべは、ひどくむち打たれます。しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。」(ルカ 12:47,48) 地獄の罰には異なる程度、質、基準があるということに関して、聖書は明白に教えています。(マタイ 11:24, ルカ 12:47, マタイ 23:15, II ペテロ 2:17) つまり、一番ひどい罰を受ける罪は、神の福音に対して悪意のある反抗です。(マタイ 11:16-24)

地獄の場所

地理上のどこかということ指定することはできません。明白な聖書の御言葉に基づいて、私たちは場所としての地獄について語ります。(ルカ 16:28, I ペテロ 3:19) しかし、このことを物質的、空間的な意味で理解してはいけません。またはこの場所がどこであるか決定してはいけません。(ローマ・カトリックは地獄が地球の真ん中にあると言います。) 聖書はこの問題について完全な情報を私たちに与えていません。なぜならば、私たちの罪深い思いは神が与えた情報では満足しないからです。**だから地獄についての多くの偽教えがでるのです。ある偽教えは地獄の存在すら否定します。**地獄は神の恵みから追いつくことによって、永遠の罰に値する者への神の永遠の正しい裁きを示す場所です。彼らが地獄はどこにあるのか探すことに一生懸命になるよりも、または地獄の存在を否定するよりも、聖霊の導きが彼らを地獄からの唯一の救いの道へと導いてくださるように祈りましょう。

地獄についての誤った教え

聖書以外の教えは「人間自身の行いによる救い」を教えます。それゆえ、「行いによる救い」を信じる人々は天国に入れると言う確信をもつことができません。人間の行いによる救いの偽教えは、かえって罪の罰への恐れを増し加えます。(ローマ 3:20) ですから、救いと地獄についての偽宗教と偽教えを信じる人々は「自分たちは地獄に行くかもしれない」という疑いを持っています。ですから彼らはこの地獄の苦しみを少しでも軽減したいか、取り除きたいのです。様々な誤った教えは今日、でも起こり続けています。

煉獄

一つの偽教えは「煉獄」です。ローマ・カトリック教会は天国と地獄の間には煉獄と呼ばれる中間の場所があり、カトリック信者の中でもごく少数のとても信仰深い人を除いては全ての者が行かなければならないと教えます。それは十字架でのイエスの死が、罪と罪の結果からのきよめを 100%完全に与えることができないこと、つまり、イエスの贖いだけでは不十分なため、人間の側からの善行、煉獄での苦しみによって償わなければならないと教えます。地獄は煉獄のようではありません。地獄の炎は罪を洗い清めると言うものではなく、地獄は罪の罰の場所です。地獄では誰も改善されません。地獄の永遠の罰によって改善されると言うことは決してありません。煉獄は罪深い人間の想像の産物です。

地獄を否定する教会

残念ながらキリスト教会においても地獄での永遠の刑罰を否定的に考える教会があるだけでなく、永遠の刑罰を信じていない教会もあります。**回復(復興)主義**は全てのものがエデンの園のように復興、復元、復活、復旧すると主張します。特に彼らは全ての人間は回復され、つまり、全ての人の罪はなくなり、最終的に救われるということです。この考えは**普遍救済論者 (UNIVERSALIST)**、または**ユニテリアン**の教義にも含まれています。彼らは次のように主張します。「次の世界に不義な者たちへの罰があっても、それは処罰と言うよりは**是正**であって、不義の者が正され、善に導かれ、最後には彼らの罪がみな清められ、**全て天国**に入ることができる。そして悪い天使のみが罰せられる」と、信じているのです。彼らにとってイエス・キリストを信じるか、否か、ということは問題ではありません。結局は罪の罰が救いのための手段となっているのです。

安息日再臨教会は地獄の存在も、死後の処罰も全く否定し、不義の者たちは絶滅し、滅亡すると教えて

います。**靈魂絶滅説**もこの世で悪であった者はさばきにおいても後にも、完全に魂は滅ぼされると主張します。また、「神は無限の愛を持っておられるので、永遠の刑罰は矛盾する。さばきにおける罰は、処罰と言うよりも懲らしめであり、やがて善に導かれ、最後には皆が救われる」と主張する人々もいます。地獄は未来にではなく、現在においてのみ体験されるものとする人も大勢います。いずれの誤りも聖書の明白な主張に反対しています。

カルビン派の「ある人々は神から永遠の地獄に落ちるために選ばれた」という教義は非聖書的です。神は決して人間を地獄に落とすために選ぶことはありません。しかし、全ての人が救われることを願っています。(エゼキエル 33:11, I テモテ 2:4-6)

日本の地獄感

日本においても様々な迷信がありますが、多くの人は地獄を「そんなに厳しくない場所」という印象を持っています。九州の別府という観光地には「地獄」と名前がつく温泉巡りがあります。人々にとって温泉は苦しむために入る場所ではなく、心身の回復のために入るのですが、観光地に「地獄」と言うタイトルを冠することはおかしなことですね。また、「地獄にも仏」と言うことわざがあります。それは地獄の苦しみの中にも仏=神の哀れみがあると言う意味です。地獄に落ちた人が、蜘蛛の糸を伝って天国に入ることができたという物語もあります。それらは地獄の苦しみを和らげています。

私は時々このような人に出会います。「わたしは地獄に行くからかまわない。」「どうせ、私は地獄に行くのだから」という人々です。ある人は「もし私の主人が地獄にいるならば、私も永遠に地獄で彼と共にいたい。」そのように言う人はラザロとお金持ちの例えを読むべきです。お金持ちは愛する者たちが彼と共に地獄に来ることを望みませんでした。なぜならば、そのお金持ちは地獄の永遠の苦しみがどれだけひどいかを経験し、知っているからです。

またクリスチャンからの「ある未信者の友人に地獄と永遠の死について伝えても、ぜんぜん関心を持たないのですが?」という相談を受けることもあります。日本人の多くの人の考えは地獄を軽く考えます。永遠の死、永遠の刑罰を軽く考えます。全面的にはありませんが、私は彼らを一つの被害者であると思います。加害者は誤った「地獄」についての教義を教える宗教やキリスト教派です。彼らが地獄の恐ろしさを聖書に書かれているように教えたならば、彼らの口からこのような言葉は決して出てこないはずですが。かえって彼らからは「地獄に行かないようにするにはどうしたらいいのでしょうか?」と言う言葉が出てくるはずですが。

この教義を教える目的は

聖書が永遠の罰について私たちに示す目的は、警告はもちろん(マタイ 3:7-12)私たちが神の怒りの恐ろしさ、罪の結果の酷さを知ることによって、また私たちの不信仰とこの世的な安心とを知ることによって(マタイ 26:41, I コリント 10:12)、救い主の必要性を認識し、キリストの恵みを追い求めるようにするため、そしてそこから救ってくださった主に感謝と賛美を示すためです。この警告は、しかしながら、未信者のためだけに意味しているのではなく、いまだ罪深い限り信者に対しても意味しているのです。(マタイ 26:24、24:42-51、ヘブル 6:4-6.)自分の家が火事であるのに気がつかない人を助けるためには、まずその人が火事という危機的状況にいることを教えなければ、その人に安全に助かる救助方法を伝えても無益としか感じないでしょう。それと同じように、神の救いのメッセージという唯一の助かる道を伝えるために、その人が死、永遠の死に対して間違えた安心しているのならば、私たちは律法によって彼らに気づかせなくてはなりません。(ローマ 3:20,4:25,5:13,)ですから、彼らが自分の状況に絶望

し、救い主に目を向けるように、私たちは神の愛の警告を伝え続けなくてはなりません。

神が聖書の中で何度もこの永遠の苦しみの場所について警告していることは、神の全ての人間への愛からです。その神の愛の警告を人間的な判断で「残酷だ」「受け入れられない」「教えたくない」とするならば、それは神の愛を軽減することです。なぜならば、私たちがこれまでに見てきたように、永遠の罰の教義は全ての罪人への神の神聖な裁きとも関係し、強調しているからです。(ローマ 2:5,6,3:4)

地獄、永遠の刑の教義は決して魂を回心させません。なぜならば、律法はただ、「神の怒りを招く」(ローマ 4:15)だからです。それにもかかわらず「律法は私たちをキリストに来るまで、私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3:24)これゆえ、地獄での永遠の罰を否定する全ての説教者たちは、「恵み深い説教者」ではありません。かえって、全ての偽預言者たちの中でも一番残酷な者です。「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。」(エゼキエル 3:18-19) また I テモテ 6:3-5 にも注目してください。「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまつて真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。」(I テモテ 6:3-5)

それこそ「愛のない教え」、「残酷な教会」です。キリストとその使徒たちは、とても明白に永遠の罰の教義を教えました。全ての伝道者はキリストの忠実なしもべとして、神の奥義の忠実な管理者として主に従わなければなりません。「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」(I コリント 4:1,2)計り知れない神の義とさばきを、どうして人間の概念から、人間の浅はかな思弁と涙っぽい感傷から、推し量ることができるでしょうか？ 私たちは明白に教えている御言葉にただ従うべきなのです。

5. キリストの裁きの席に立つことを

楽しみに待っている時のクリスチャンの態度

終わりの日についての多くの御言葉は、私たちが不安にさせるときがあります。「小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなた方が反キリストの来ることを聞いていたとおり、いまや、多くの反キリストが現れています。それによって今が終わりの時であることがわかります。」(Iヨハネ 2:18)「ある人々のように、一緒に集まることをやめたりしないで、かえって励ましあい、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか?」(ヘブル 10:25,10:37)「あなた方も耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。」(ヤコブ 5:8)「万物の終わりが近づきました。」(Iペテロ 4:7)

また最後の審判に先立つ世の終りの時には、苦しみや困難がそれまでよりもいっそう厳しくなると述べられています(マタイ 24 章、IIペテロ 3 章、IIテモテ 3:1)。「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない。」(使徒 14:22)では、私たちは主の再臨のときまで、不安と怯えを持ちながら待ち続けましょうか?

私たちはおびえることなく、裁きの座に立てます

しかし、これまで見てきたように、神の律法が伝える私たちの罪への神の怒りに、私たちは怯えることも、絶望する必要も全くありません。私たちはイエス・キリストの贖いのゆえに確信を持ってキリストの裁きの座に立つことができます。なぜならば**イエス・キリストの尊い犠牲は、完全に私たちの罪を贖うために十分だったからです**。「イエス・キリストの体が、ただ一度だけ捧げられたことにより、私たちは聖なる者とされているのです。」(ヘブル 10:10)「キリストは聖なる者とされる人々を、一つの捧げ物によって、永遠に全うされたのです。」(ヘブル 10:14,詩篇 49:7-9,15) **私たちの行いや、徳ではなく、神ご自身が私たちの救いであるからです**。「見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。」(イザヤ 12:2,詩篇 49:7-9,15)

神ご自身がイエスを信じる私たちを「義」と認めてくださったからです。「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、値なしに義と認められるのです。」(ローマ 3:22-24,1:16,17,創世記 15:6)誰がなんと言おうと、神が私たちを「義」と認めてくださった事実は決して覆ることがありません。サタンにもそれはできません。「神に選ばれた人々を訴えるのは誰ですか?神が義と認めてくださるのです。」(ローマ 8:33-34,38,39)私たちの罪が「たとえ、緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」(イザヤ 1:18)「彼らは大きな患難から抜け出てきた者たちで、その衣を子羊の血で洗って、白くしたのです」(黙示録 7:14) **神は何度も私たちを「聖なる者=罪のない者」と呼んでくださるからです**。「しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」(Iコリント 6:11, Iテサロニケ 3:9-13) **神は何度も私たちを「神の子」と呼んでくださっているからです**。「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」(ガラテヤ 3:26)

他の人が「自分は幸せである、自分の人生は正しい、しかし、あなたはそうではない。」と言う言葉にも惑わされる必要はありません。なぜならば、**主が神の子である私たちこそ「幸いな者である」と、聖書の中で何度も呼んでいるからです**。「不法を赦され、罪を覆われた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」(ローマ 4:7、8,マタイ 5:1-12, 詩篇 1 篇、ルカ 11:28)

神は何度も「あなたの罪は拭い去られた」と言っています。「東が西から遠く離れているように、私たちの背きの罪を私たちから遠く話される。」(詩篇 103:12)「あなたのような神が、他にあるでしょうか。あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、背きの罪を見過ごされ、怒りをいつまでも持ち続けず、慈しみを喜ばれるからです。私たちを哀れみ、私たちの咎を踏みつけて、全ての罪を海の深みに投げ捨てた。」(ミカ 7:18,19)神が罪の赦しを確約してくださっていることは事実です。「わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたの背きの罪を拭い去り、もうあなたの罪を思い出さない。」(イザヤ 43:25、ヘブル 8:12)「あなたの民で、あの書に記されている者は全て救われる」(ダニエル 12:1)そして神はご自分のことを「主」と言う名前で現してくださいました。これは「契約の神」、つまり私たちの主は私たちへのその約束を変えることも、取り消すことも、忘れることもない唯一の方であることも忘れてはいけません。(I ペテロ 1:25) 私たちの全ての罪はイエスのゆえに完全に赦されたのです。

それでもあなたが不安を持つならば

あなたが終りの日にキリストの前に立つことに不安を持つならば、ぜひ次の御言葉も覚えてください。「罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」(ローマ 6:14-18) 罪は私たちを支配しません。なぜならば、私たちは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。私たち新しい霊的な命を与えられたクリスチャンの生活は、律法を破った罰への恐れによるのではなく、神の恵みが私たちのためにしてくださったことに対する感謝が動機となるはずです。

最高の権威者が私たちを義と認めてくださいました

クリスチャンにとって、受けるべきだった罪の有罪の判決は、イエスのゆえに「罪の赦し」と「義認」の宣言へと変えられました。クリスチャンは恵みによってイエスが勝ち取られた罪の赦し、義認を自分のものとししました。(ガラテヤ 4:4-5,ローマ 6:14-15) 神に無罪と宣告されたことは決して覆りません。(ローマ 8:33-34) 神が義と認められた私たちの罪を調べることもしません。神は聖です、真実です。(II テモテ 2:13、レビ 19:2,申命記 32:4)

地方裁判所で無罪とされても、最高裁判所で有罪とされたら、どちらが適用されるのでしょうか？権力のある最高裁判所ですね。同じようにこの世の中の人、この世の裁判官があなたのことを犯罪者として裁いても、たとえ死刑の判決を受ける罪を犯しても(ルカ 23:33-43)、全ての上にある最高の権威のある、正義の神である裁判官が無罪と宣言されるならば、終わりの日には神の裁きのとおりなのです。(ローマ 8:31-39) たとえサタンでさえも、高さも深さも権威者も、お金も、何であつても私たちをキリストの愛から引き離すことができないように、それらのものもキリストの判決を覆すことは決してできません。

審判者は私たちのぼろ服(イザヤ 64:6)を見るのではなく、私たちのために審判者自身が勝ち取ってくださった、そして差し出してくださっている「救いの衣、義の外套」を信じて受け取った人の、その上着のみを見るのです。(黙示録 7:9-17、イザヤ 61:10.)審判者自身がこのように言っています。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの言葉を聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、

永遠のいのちを持ち、裁きに会うことがなく、死から命に移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

使徒ヨハネは啓示の中で主イエスが言うのを聞きました。「見よ、私は盗人のように来る。目を覚まして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。」(黙示録 16:15)イエスが言ったことは「あなたが主の完全な義の衣を身にまとっていることをいつも確かめるように」という意味です。信仰による衣をまとった私たちは、罪のしみだらけの衣について、裁きの日に神の御前に立つことを恐れる必要はありません。染みのない衣を与えられている私たちは、共に喜びを持ってイザヤの言葉を叫びます。「わたしは主によって大いに楽しみ、私の魂も、私の神によって喜ぶ。主が私に、救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」(イザヤ 61:10)

神の恵みによって神の子とされた私たちを、神の下から奪い去られること、「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28、 I ヨハネ 5:16)、主がわたしたちを見捨てることもないことも、「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」(ヨハネ 6:37、イザヤ 49:15、ヘブル 13:5)、そして、私たちが見てきたように、私たちの救いの事実も疑う必要は全くありません。

しかし、この偉大な祝福を失う可能性が全くないわけではありません。私たちのほうから主を離れることが唯一のこの祝福を失う方法です。(ヘブル 4:11,10:4-6,マタイ 12:31-32, I テモテ 6:20)実に私たちが神への不信仰に陥るようになるきっかけや、原因は私たちのうちに住み、また私たちの周りを取り囲んでいます。ですから、私たちがこの世で生きていく中で、どのように自分の罪、欲、世の中の誘惑や迫害、サタンの誘いを退けるか?聖書に聞いていきましょう。

私たちはどのようにして終わりの日に備えればよいですか?

終わりの日まで、クリスチャンたちは日ごとに神の言葉を読みことや、思い巡らすことによって信仰を養います。お互いを励ますため、忠告するため、強めるため、恵みの手段を行うために礼拝に定期的集まります。(ヘブル10:25)これらの神の恵みの手段を通して、聖霊は継続的に私たちの信仰のランプにオイルを補充します。花婿が来る時に準備が整っていなかった5人の愚かな娘たちについて覚えていますか?彼女たちは恵みの手段の使い方に失敗しました。「その後で、ほかの娘たちも来て「ご主人様、開けてください。」と言った。しかし、彼は答えて「確かなところ、私はあなた方を知りません。」と言った。(マタイ25:11,12)

祈りましょう

終わりの日までの準備として、クリスチャンは「祈る」こともとても大事な部分です。私たちの古いアダムは祈ることを無視するようにとささやき続けます。祈らない言い訳をするように助けます。「私たちはとても忙しい。時間がない。他にもっと大事なことがある。」何という言い訳でしょうか?私たちがイエスの言葉を思い出すと良いでしょう。「あなた方はやがて起ころうとしているこれら全てのことから逃れ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ 21:36)パウロは同じように言いました。「目を覚まして、感謝を持って、たゆみなく祈りなさい。」(コロサイ 4:2)ペテロも「万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」(I ペテロ 4:7) 終りの日まで私たちの救い主への信仰を失わないように祈り、励ましあいましょう (I テサロニケ 3:9-13)

自分の罪深さとの戦い

私たちが神の約束を信じることができない、またローマやテサロニケの会衆のように悪い安心を持って罪を犯し続けるならば、私たち自身を再び「罪の奴隷」にします。彼らは仕事をやめ、責任を放棄し、何もしないでただ終わりの日を待ちました。パウロははっきりと彼らを叱りました。(Ⅱテサロニケ 3:10,12)

人間は罪の奴隷であるか、義の奴隷であるかのどちらかです。(マタイ 12:30,6:24) 私たち罪人を、ご自身の死と勝利の復活をもって「神のもの」としてくださったことを忘れていませんか? 主の者とされた私たちは主の相続をいただきます。それは主キリスト、恵みの下にあつてのみ得ることができるものであり、絶対に確実な祝福です。あなたがせっかくこの栄光ある神の恵みのおかかっているにもかかわらず、罪と運命を共にして、罪の奴隷として歩み、永遠の死の苦しみに会うことを選ぶのは、最も愚かなことではありませんか?

ペテロの言葉は私たちを裁きの日のための正しい準備へと向かわせます。それは「身をつつしみ、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」(Ⅰペテロ 5:8)と警告しているからです。サタンは神の御心とは逆に、一人でも多くのクリスチャンが神を離れ、永遠の苦しみを味わうことを願っていますから。もうすでに裁かれているサタンは終わりの日まで、一人でも多くの人を地獄に道連れにするためにあらゆる方法を用います。サタンは主イエスを誘惑したときのように悩みや試練、お金、権力、偶像(マタイ 4:1-11)を用いるでしょう。「あなた方の心が、放蕩や深酒やこの世のわずらいのために沈みこんでいるところに、その火が畏のように、突然あなた方に望むことのないように、よく気をつけていなさい。その日は、全地の表に住む全ての人に臨むからです。」(ルカ 21:34,35)

この世の誘惑

この世に住んでいる私たちクリスチャンは、いつも天国の偉大な相続を失う危険性の中にいます。インフルエンザやコンピューター・ウィルスよりも、罪は簡単に伝染します。それはこの世のどこでも、外だけではなく、家、教会の中にまで簡単に入り込みます。テレビ番組、コマーシャル、雑誌、習慣、うわさ、広告、音楽、学校のクラス、友人、そして愛する家族などを通して伝染します。それらを通して私たちが強盗、強姦、詐欺、殺人、姦淫、下品、その他の魅惑的な罪と日ごとに接触することはとても危険です。なぜならば、そのような罪はもはや私たちにとってショックなことではなくなります。私たちの良心は罪によって簡単に麻痺します。

偽教え

サタンは聖書を良く知っており、巧みに**偽教え**によって私たちを誘惑します。終わりの日について告げる時、聖書は何度も「目を覚ましていなさい」とクリスチャンに警告しています。(マタイ 24:42,25:13, マルコ 13:35, Ⅰテサロニケ 5:8, 黙示録 16:15.) また、主は「惑わされないように」とも警告しています。終わりの日の前兆として様々な偽教えや偽キリストが現れクリスチャンたちを惑わすと聖書は言っています。(マタイ 24:5, 11, マルコ 13:6, Ⅱテサロニケ 2:1-、黙示録 20:3) 「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「霊知」と呼ばれる反対論を避けなさい。」(Ⅰテモテ 6:20.)

千年王国説のように「最後の審判に先立って(またはその後)、主イエスが目に見える姿で現れ、聖

徒たちをよみがえらせ、彼らと共にこの地上を1000年の間お治めになり、神の教会へのサタンの試み、悩ますことを絶滅される」と言っていますが、彼らのように私たちの希望をこの地上に置かないようにしましょう。ヨハネ18:36で「私の国はこの世には属していない」とイエスご自身も言っています。ルカ9:28-36の主の変貌の時にも、ペテロはイエス、モーセ、エリヤにその山で幕屋を立てることを提案しました。ペテロはその主の栄光をこの地上に留めておきたかったのですが、イエスはその申し出に対して何もお答えになりませんでした。(モーセ、エリヤも天の祝福に預かっているのです、もはや地上に住みたいとは決して思わないでしょう) 私たちはこの滅び行く、一時的な安らぎしか与えない、地上での幸せ、喜びを追い求めないようにしましょう。主の日に神の有罪を受ける者とならないように、信仰の目を開けて神の国を追い求めましょう。(マタイ6:33, コロサイ3:1,2、ヘブル11:16,11:26,)

これらもサタンの働きによるものです。サタンは偽りの力、不思議、大きなしるしをも用いますが、私たちは荒野でイエスがそのようにしたように、御言葉によってそれらを退けましょう。ご自分のいのちさえも投げ出して、私たちの救いを完成された救い主に現れている神の愛を、一人ひとりに思い起こさせ、刻み込ませることは何よりも大事です。「御子イエスの血は全ての罪から私たちをきよめます。」(Iヨハネ1:7)

この世の誘惑に立ち向かうには

私たちクリスチャンはこの世から隔離して暮らすことはできませんが、この世、サタンに対して武装することはできます。そのために全てのクリスチャン教育は絶対に不可欠です。神の御言葉の教育は信仰の盾、御霊の剣によって、私たちを武装させます。(エペソ6:16,17)

パウロがテサロニケのクリスチャンたちを励ました言葉を思い巡らしましょう。「兄弟たち。それらがいいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」(Iテサロニケ 5:1-8)

ペテロは同じ考えを強調しています。「そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなた方ですから、染みも傷もない者として、平安を持って御前に出られるように、励みなさい。愛する人たち。そういうわけですから、このことをあらかじめ知っておいて、よく気をつけ、無節操な者たちの迷いに誘い込まれて自分自身の堅実さを失うことにならないようにしなさい。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠に至るまでもありますように。アーメン」(IIペテロ3:14,17,18)

律法と福音を使い分けましょう。聞き分けましょう

律法は「私たちは全て、神の裁きの座に現れなくてはならない。」ということをおぼろげに思い出させます。全ての人間が自分の行った全てのこと、一切の罪を釈明しなければならぬと告げています。これを聞く時、私たちは自分が罪を犯していることを認め、疑問、恐れ、絶望を抱きます。律法は罪深い肉を抑制する役

目があります。裁きの日に自分の罪を釈明しなければならないと威嚇される時、私たちはこの律法の働きにより、ある程度自らを抑制することができます。

福音には威嚇も要求もありません。先ほどの律法によって恐れている人に、神の福音は次のように安心させます。「わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたの背きの罪を拭い去り、もうあなたの罪を思い出さない。」(イザヤ 43:25) 福音はキリスト、罪の赦し、救いを無償で差し出し、私たちを慰め、安心させ、キリストを信じる信仰によって導いているのです。

クリスチャンも依然として罪深い古いアダムを身につけているのだから、律法にも福音にも耳を貸さなくてはなりません。この裁きの日の律法を聞く時、罪を深く意識させ、恐怖によって私たちの罪深さを叩き潰されなくてはなりません。それから、全ての罪がキリストを通して、取り去られると告げる福音を私たちの避け所としなければなりません。このように律法と福音を正しく使い分けることも、裁きの日についての正しい準備に絶対に不可欠なのです。

義の奴隷として歩みなさい

一日一日が過ぎていくと言うことは、私たちが終わりの日、または恵みの時間の終わりに近づいていることを示しています。私たちが終わりの日に確実に『無罪』と宣言されることと、天国に入れることは確実であるからと言って、私たちは誤った安心を持つてはいけません。私たちは確実に救われるので、**安心して罪を犯し続けましょうか?**それは罪の奴隷から完全に解放されたクリスチャンの態度ではありません。むしろ、救い主への感謝と愛を持たない未信者の態度です。「あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと思いなさい。ですから、あなたがたの死ぬべき体を罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵の下にあるからです。それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵の下にあるのだから罪を犯そう、と言うことになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。」(ローマ6:11-12,14-15)かえって「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷として捧げて、不法に進みましたが、今は、**その手足を義の奴隷として捧げて、聖潔に進みなさい。**」(ローマ6:17-19)同じ奴隷であっても、**義の奴隷とされた私たちは、喜んで自分の能力、時間、愛をもって主に仕えたいのです。**

つまり、終わりの日のための正しい準備とは、私たちが主に召されたことへの責任を恵みの時間の中で忠実に果たすことでもあります。それは私たちが感謝と愛と喜びを持って、神の言葉を正しく聞き、伝えることを通して、神と、隣人に仕え、私たちが行う全てのことで神の栄光を現すという意味です。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」(I コリント10:31,コロサイ3:12-17, I ペテロ2:9, マタイ25章タラントのたとえ)

熱心に福音の種を蒔く人となることは正しい準備です

私たち皆はイエス・キリストの弟子であり、クリスチャンの人生で特別な招命があります。(I ペテロ2:9) 私たちが牧師、教師、長老、一般会員であるかは関係ありません。私たちは主の証人です。私たちの心を満たす福音の喜びを分け合うことは、生きている木が実を結ぶのと同じように私たちにとって自然なことです。「心に満ちていることを口が話すのです。」(マタイ12:34)「私は信じた。それゆえに語った。」(II コリント4:13.)

迫害は私たちの伝道を止めることはできません。それは旧約聖書の預言者たちや新約時代の使徒たち

の働きで明らかに見えます。「そこで彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり、教えたりしてはならない、と命じた。ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。『神に聞き従うより、あなた方に聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。』」(使徒4:18-20)逆に神は迫害をも伝道を補助する道具として許可しました。「他方、散らされた人たちは、御言葉を述べながら、巡り歩いた。」(使徒8:4)

弟子たちと同じ福音の喜びを持つ私たちは、主が備えてくださった多くの機会に働きたくありませんか?世界のクリスチャン人口は全体の3分の2であると言われていますが、これは目に見える教会=ただ名義上のクリスチャンの集まりに過ぎず、目に見えない教会=真の信者は更に少ないのです。(日本では100人に一人が名義上のクリスチャンであると言われていています。)この「告白福音ルーテル連盟」に属する私たちは、この世に住んでいる人口の100分の1にも足りないことは事実です。しかし、逆に言えば私たちの前には100分の99以上の広大な伝道の地が広がっているのです。それは私たちを落胆させるより、福音の種を蒔く喜びをもたせます。主は私たちに「神の御言葉を蒔きなさい」と命じましたが、主を愛する私たちにとってそれは重荷、労苦、仕事ではありません。(Iヨハネ5:3,ヨハネ14:23,24)

昇天されたイエスが雲の中に見えなくなった後、天使たちは弟子たちを叱責しました。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか?(使徒 1:11) その言葉の意味は明白です。「あなたがたのやるべきことに取り掛かりなさい。あなたたちにはしなければならぬことがあります。」と言うことです。「主の再臨のために正しい準備をする」「神の国をまず第一に求めなさい」と言うことは、ただ空を見上げる人になりなさいと言う意味ではなく、主の忠実な僕として熱心に働きなさいという意味です。それは自分自身をサタンの誘惑から守る、清く保つことだけではなく、「全世界に出て行き、全ての造られた者に、福音を述べ伝えなさい。」(マルコ16:15)と言う主の命令に対しても熱心でなくてはならないと言う意味も含まれています。

私たちは主の恵みによって尊い賜物をいただきました。私たちは純潔で、混ぜもののない神の喜びの知らせ、神の力、真理、永遠の救いが入っている福音を持っているのです。私たちはこの賜物を守らなければなりません。「福音と言っても、もう一つ別の福音があるのではありません。」(ガラテヤ1:7-9,ローマ1:16,17,IIテモテ4:2-5) 私たち主のしもべは、主が預けてくださったこの賜物を主が望むように用いなくてはなりません。パウロの告白を聞きましょう。「私は全てのことを、福音のためにしています。」(Iコリント9:23)

世の中に救い主の希望の光を隠すのではなく、輝かせましょう。(マタイ5:14-16)「神は、実に、その一人子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠の命を持つためである。」(ヨハネ3:16,ヘブル9:27,28.)この福音は私たちの伝道の、礼拝の、説教の、生活の動機です。

信仰と知識の一致の賜物

もう一つのすばらしい賜物を神の恵みによっていただいています。それは「信仰と知識の一致」の賜物です。国籍、言語と、習慣、働く場所が異なったとしても、私たちは主にあって、信仰の一致と、知識の一致を与えられています。「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなた方をお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」(Iコリント1:10,エペソ4:3-6,13)私たちの教会、神学校、日曜学校、聖書研究会、伝道では、同じ主の御心が語られ、同じ判断、同じ知識が保たれています。しかし、この一致は人の働きと知恵によって造られてできるものでは決してありません。(Iコリント2:14)それはただ聖霊の働き

によってのみできるものです。この賜物について神に感謝しましょう。この一致がさらに広がるように、さらに強い一致になるように、主に祈りましょう。

あなたと私は神の国民です。私たちは主にあって兄弟姉妹です。私たちは真理である福音を所有しています。主の完全な人生と、身代わりの死によって、神の恵みのゆえに私たちは、サタン、罪の罰、死からの永遠であり完全で真の自由を持っています。(ヘブル2:14,15)

聖書は初期教会の時代から終わりの日についての警告によって(律法)、クリスチャンたちを準備させてきました。また、福音によって主の再臨とよみがえりへの喜びと期待を鼓舞し続けてきました。「今からは義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、誰にでも授けてくださるのです。」(IIテモテ4:8)「キリストは二度目は罪を負うためではなく、待望している人たちに救いをもたらすために現れてくださる。」(ヘブル9:28, ローマ13:11、Iコリント1:7,7:29、テトス2:12,13) これらの言葉を通して、この困難な新約時代において、私たちが怠慢にならないため(Iテサロニケ5:3)、神の恵みからもれないため、私たちが神に喜ばれる生活を忠実に送るよう、そして私たちが喜んで主を待ち望むことができるようにさせてくださっているのです!

最後に次の聖句を思い巡らしましょう。「このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、裁きの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。愛には恐れがありません。まったく愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れるものの愛は、まったくものとなっていないのです。」(Iヨハネ 4:17,18)神の愛はすでに私たちに注がれています。私たちは自分の愛にしたがって、神を愛し、隣人を愛する生活を送ってはいけません。神の与えてくださった愛によって、神を愛し、隣人を愛する生活を終わりの日まで送りましょう。神は愛です。私たちに誘惑、試練、悩み、迫害があるとき、この短い言葉を覚えましょう。

なぜならば、私たちに起こる苦難や迫害など望まない状況にあっても、神は全てのことをこの神の愛をもって働いているからです。なんと言う慰めでしょう。神が私たちを取り扱ってくださる愛は両親や子供たちにあるよりも、人間が持っているすべての愛をはるかに超えた愛なのです。(ヨハネ 15:13, イザヤ 49:15)この箇所では神は神の愛が私たちに支配するようにと促します。誰も恐れを持って生活をした人はいません。それならば、御言葉を読みつづけ、神の愛を注がれつづけましょう。

神の愛は私たちが天国での永遠の命をいただける「神の子」として認めてくださいました。ですから、私たちは人生での全ての時に、恐れる必要がないのです。神は私たちが罪の恐れ、死の恐れ、裁きの日への恐れと疑いにおいて無駄に過ごすことを望みません。「まったく愛は恐れを締め出します。」神の愛は私たちから恐れを締め出してくださいました。神の愛のゆえに、私たちの恐れの原因はすべて洗い流されたからです。

私たちは聖書の最後の言葉を使徒ヨハネと共に、喜びと平安をもって一緒に叫びましょう!「これらのことをあかしする方がこう言われる『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵がすべてのものと共にあるように。アーメン」(黙示録22:20-21)

参考文献一覧

* マルチン・ルター博士による小教理問答書解説

* E.W.A.ケーラー著「ルターの小教理問答書 注釈」コンコーディア神学校出版部

* E.W.A.ケーラー 著「キリスト教教義の要約」第2部「終わりのことについて」

* アーミン・W・シュエッツェ著「神のみ言葉を導きとして」

13. 私の罪は裁きの日に思い出されるだろうか

* J.T.ミューラー著、「キリスト教教義」終わりのことについての教義

* W.R.ガーウィッシュ著、「終わりの事柄についての主の御言葉」

* アウグスブルグ信仰告白・アウグスブルグ信仰告白・弁証論 第17条

* M.J.エリクソン著、「キリスト教神学・第3巻」

* 勝本正実著、「日本人の心に福音をどう伝えるか?」いのちのことば社

* ジョージ・ルーキー著、「ルーテル教会の教義と慣習」コンコーディア出版社

* A.J.ペニング著「ローマ人への手紙・ピープルズ・バイブル」ノースウェスタン・パブリッシング・ハウス

* M.A.ジャスキー著、「ヤコブの手紙、ペテロの手紙、ユダの手紙・ピープルズ・バイブル」ノースウェスタン・パブリッシング・ハウス

* 聖書の引用箇所は『新改訳聖書』から引用

* この論文のために惜しみなく賜物と時間を用いて奉仕して下さった、カーミット・ハベン師、ヨシユア・スターマン師、加藤ひとみ姉、ケイティ・ウォーニング姉に心から感謝いたします。